二〇二二年度活動記録

《公開学術フォーラム》

●第5回東アジア文化権力研究学術　フォーラム「伝統と正統性、その創造と統制・隠滅」

・日時　二〇二二年十月二十九日（土）　十四時～十八時

・場所　オンライン開催（Zoom ミーティング）

・内容

第4回フォーラムまでの内容を承けて、近代・現代の日本において、主に日本文学・文化にかかわって伝統や正統性を創造・統制・隠滅する動きについて、前近代からの連続性を意識しながら、2人の報告者の報告内容をもとに考える。

・講師

李　思漢（国立政治大学台湾文学研究所博士研究員）

「植民地台湾における義太夫節浄瑠璃：「素人」の活動を中心に」

鈴木　彰（立教大学）

「平将門観と近代日本――将門雪冤論の系脈と織田完之」

・総合討論

討論者

宋　錫源（韓国・慶熙大学校）、榊原千鶴（元名古屋大学）、松澤俊二（桃山学院大学）、菊野雅之（北海道教育大学）、呉　佩珍（台湾国立政治大学）、湯本優希（日本体育大学桜華高等学校教諭、立教大学日本学研究所研究員）、VAN EWIJK Aafke（ライデン大学地域研究科博士後期課程 PhD candidate）

・司会

鈴木　彰（立教大学文学部教授、日本学研究所所員）

徐　禎完（韓国・翰林大学校）

・主催　立教大学日本学研究所、翰林大学校日本学研究所

・2017韓国研究財団　人文韓国プラス（HK+）人文基礎学問分野〈ポスト帝国の文化権力と東アジア〉関連事業

《公開シンポジウム》

●国際シンポジウム「日本と東アジアの〈異文化交流文学史〉」

・日時　二〇二二年十一月五日（土）十時～十七時三十分

六日（日）九時三十分～十八時

・場所　立教大学池袋キャンパス　太刀川記念館三階カンファレンスルーム

オンライン（Zoom ウェビナーを利用）併用

・内容

〈異文化交流文学史〉とは、今日の国際化時代に応じて関心の高い、多様な異文化との交流や交渉を通して生まれ、享受、再生された文学の総体を意味する。特に16世紀の大航海時代は、地球規模での文化交流が活発化し、アジアや日本が西洋文化と初めて接触する、近代の始発期として特筆される。〈異文化交流文学史〉は善隣友好に止まらず、蒙古襲来や壬辰戦争などの対外戦争や倭寇のもたらした文学も含み、歴史実体に還元されない、架空・幻想の領域をも対象とする。16世紀を中心にその前後にも視野をひろげ、日本と東アジア各地域に即した基礎的な資料学から再構築し、身体芸や図像イメージの表象なども併せてその全体像を究明することで、既存の文学史の再編をめざす。本

シンポジウムでは、1．外交使節とその文学言説・表象（燕行使・通信使等）、2．渡海、漂流、流刑をめぐる文学言説・表象、3．交易、物流をめぐる文学言説・表象、4．宗教をめぐる文学言説・表象（求法伝法・聖地巡礼等）、5．対外・侵略戦争の文学言説・表象（蒙古襲来・壬辰倭乱・琉球・蝦夷、人身売買・拉致亡命等）、6．幻想・架空の往還、文化交流の文学言説（含・異人・異域等の他者表象）の観点からこの課題に取り組む。

なお、海外在住の講師・コメンテーターはオンラインでの参加とする。

• 講師・コメンテーター・司会

基調講演

小峯和明（立教大学名誉教授、中国人民大学高端外国専家）、阿部龍一（ハーバード大学東アジア言語文化学部教授）、岡　美穂子（東京大学史料編纂所・大学院情報学環教授）、松居竜五（龍谷大学教授）

シンポジウムA

伊藤　聡（茨城大学人文社会科学部教授）、大西和彦（一般財団法人アジア国際交流奨学財団日本語研究員）、高　陽（中国・清華大学人文学院外文系准教授）

〈コメンテーター〉水口幹記（藤女子大学文学部教授）、Matthias Hayek（フランス高等研究実習院・宗教部門教授）、趙　恩馝（韓国・崇実大学校講師）

〈司会〉小峯和明（前掲）、原　克昭（弘前大学准教授）

シンポジウムB

徳竹由明（中京大学教授）、松本真輔（長崎外国語大学教授）、Pham Le Huy（ベトナム国家大学ハノイ校講師）

〈コメンテーター〉佐伯真一（青山学院大学名誉教授）、渡辺美季（東京大学准教授）、NGUYEN THI OANH（ハノイ・タンロン大学タンロン認識教育研究院副院長）

〈司会〉目黒将史（県立広島大学准教授）、佐野愛子（明治大学兼任講師）

シンポジウムC

北條勝貴（上智大学文学部教授）、崔　英花（中国・南通大学副教授）、王　尊龍（立教大学大学院博士課程後期課程）

〈コメンテーター〉関　周一（宮崎大学教育学部教授）、金　英珠（韓国外国語大学校講師）、屋良健一郎（名桜大学国際学群上級准教授）

〈司会〉鈴木　彰（立教大学文学部教授）、平澤卓也（立教大学文学部助教）

シンポジウムD

李　暁源（韓国・仁荷大学校韓国語文学科助教授）、木村淳也（明治大学文学部兼任講師）、陳　小法（中国・湖南師範大学外国語学院教授）

〈コメンテーター〉山本嘉孝（国文学研究資料館准教授）、高津　孝（放送大学鹿児島学習センター所長・特任教授）、金　文京（京都大学名誉教授）

〈司会〉河野貴美子（早稲田大学文学学術院教授）、宇野瑞木（専修大学文学部日本文学文化学科講師）

シンポジウムE

大木　康（東京大学東洋文化研究所教授）、松浦史明（日本学術振興会特別研究員）、位田絵美（近畿大学産業理工学部准教授）

〈コメンテーター〉中島楽章（九州大学人文科学研究院准教授）、樋口大祐（神戸大学大学院人文学研究科教授）、小林ふみ子（法政大学文学部教授）

〈司会〉染谷智幸（茨城キリスト教大学文学部教授）、山田恭子（近畿大学法学部准教授）

ラウンドテーブル

荒木　浩（国際日本文化研究センター教授）、横山　學（ノートルダム清心女子大学名誉教授、早稲田大学招聘研究員）、Tzvetana Kristeva（国際基督教大学名誉教授、早稲田大学国際日本学研究所員）、李　成市（早稲田大学文学学術院教授）、ハルオ・シラネ（コロンビア大学教授）

〈司会〉千本英史（奈良女子大学名誉教授）

・総合司会

出口久徳氏（立教新座中学校・高等学校教諭）、宮腰直人（同志社女子大学表象文化学部准教授）

・主催

立教大学日本学研究所、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「16世紀前後の日本と東アジアの〈異文化交流文学史〉をめぐる総合的比較研究」（代表者：小峯和明、研究課題番号20H01236）

・共催

立教大学日本文学会、立教大学文学部文学科日本文学専修、同大学院文学研究科日本文学専攻

●公開シンポジウム「はじめての日本史探究：歴史教育と歴史学の幸せな関係を求めて」

・日時：二〇二三年三月二十六日（日）十時～十六時三十分

・場所：立教大学池袋キャンパスのマキムホール MB01教室

・主催

立教大学日本学研究所

・共催

科学研究費補助金（基盤C）「近代日本の大学における歴史研究・教育体制と学術行政」（代表者：奈須恵子（立教大学））（19K02461）、科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「前近代海域アジア史の新たな知見にもとづく高等学校地理歴史科の探究型教材の開発」（代表者：大西信行（中央大学））（20K2220）

・後援

高大連携歴史教育研究会

・内容

二〇二二年度から年次進行で施行される新しい高等学校学習指導要領で新科目として導入される「日本史探究」について、さまざまな立場から提言することを目的として開催された。グローバルヒストリーの深化や新科目「歴史総合」の導入にともない、世界史教育や近現代史の見直しの動きは活発であるが、日本史、なかでも中世史は既存の教科書叙述の見直しを迫る成果が多く公刊されているにもかかわらず、それをどのように歴史教育に取り込んでいくか、歴史教育の現場がどのような成果発信を研究者に求めているか、それらの対話は活発に行われているとはいえない。そこで、シンポジウムを開き、両者の対話を活発に進めていくことを企図した。

・各報告の要旨

大西信行（中央大学）による趣旨説明ののち、大西を司会として、個別報告六本とコメント二本と総合討論が行われた。大西の趣旨説明では、「幸せな関係」という企画タイトルの含意として、歴史教育を

「暗記ゲーム」にしてきた「黄金のトライアングル」の議論が紹介された（座談会「歴史学と歴史教育の新たな協力を目指して　過去に学び、未来を考える」『史苑』八三巻一号、二〇二三年）。

佐藤雄基（立教大学）「日本史教科書の枠組みをつくってきたものはなにか？：法制史と経済史」では、①世界史教科書と比べたとき、日本史教科書の枠組みとして「通史」の規定性が強いこと、その「通史」の枠組みがどのように形作られてきたのか、通史を学習する意義がどのように説明されてきたのか、を振りかえる必要性があること、②荘園制に関する記述が平安期に偏っており、鎌倉期以降は武士による荘園侵略という記述が基調になる点に関して、かなり古い中世史像の影響が強く残っていること、とりわけ鎌倉時代が事実上「鎌倉幕府の歴史」となっていることに注意を促したうえで、武家政権発達史の枠組みを意識的に捨てる必要があるのではないかと問題提起し、③教科書叙述がどういう歴史像のもとに作られ、その影響が残っているのか、史学史的な観点に基づきながら考えなければ、叙述を新しくすることはできないのではないかと指摘した。

竹田和夫（新潟大学）「日本中世史研究と高校日本史探究との対話：藤木久志の研究と高校授業」では、立教大学の教員だった藤木久志の日本中世史研究を振りかえりながら、高校授業の実践にどのように活かしていくのかを主題としたものだが、その前提として戦後の歴史学研究と歴史教育との関係について詳細なサーヴェイを行っている。とりわけ戦後歴史学の早い時期から歴史研究者と歴史教育の協働・連携が活発に行われてきたこと、様々な取り組みを行ってきたことが、詳細な文献データとともに明らかにされた。藤木久は新潟県出身であり、その研究には新潟県に関わるものも多く、報告者が現在新潟大学で担当している教職の授業において、教員志望の大学生が藤木の研究をどのように受けとめ、それを活用して授業案を作成しているのか、具体例の紹介がなされた。

横井成行（海城中学高等学校）「歴史的文脈から考える「学び」の多様性と広がりに関する一検証：角を矯めて牛を殺す語」は、「アクティブ・ラーニング」として現在議論されているものは、「新教育運動」やその一環としての「大正自由主義教育運動」での実践や試行は先行してあり、それ自体は何も目新しいものではないことが指摘され、中等教育の現場での「教授法」はもっと多様性に満ちていてよいということが強調された。その上で、歴史学と歴史教育との関係や教育の「現場」が直面している「危機」を相対化するために「歴史的文脈」から探ることの重要性が指摘され、北欧と近代日本の関係と「大正自由主義教育運動」が紹介された。

野村育世（女子美術大学付属高等学校・中学校）「あらゆる政権はジェンダーを規定する：ジェンダー視点を導入するにはどうしたらよいか」では、日本史Bから探究となって女性の人名がむしろ減少傾向になること（用語精選の結果）などを皮切りとして、ジェンダー史とは決して一分野ではなく全体を分析する視点であり、「コラム」として女性史をテーマ指摘に付け足すのではだめであり、教科書本文にきちんとジェンダー史的な視点を組み込んでいく必要があることが強調された。教科書に載せる人物を選択する場合、できるだけ女性を採る努力が必要であるという提言がなされた。また、具体的な例として、鎌倉幕府と武士の生活が取り上げられ、御成敗式目という史料や北条政子という政治家の取り上げられ方を通じて、ジェンダー史的な視点の実践例が提示された。

中村崇志（県立新潟向陽高等学校）「『歴史総合』と『日本史探究』を接続するにはどうすればよいか」では、授業実践の具体的な紹介がなされた。①ウクライナ戦争を見据えて、日本とロシアの歴史教科書の比較、②日本史探究を見通した日本史Bの実践例として戦前・戦中の国史教科書との比較、であり、歴史教科書の叙述を「事実」として絶対視するのではなく、異なる歴史解釈、異なる歴史叙述を受け入れる姿勢を育成する狙いがあるとされた。歴史総合と日本史探究とでは学び方が異なることから、近現代史は「同じことを二度やる」わけではなく、歴史総合で多様な歴史解釈や歴史叙述を受け入れる姿勢を身に付けているので、前近代の歴史が近現代にどのように解釈され叙述されてきたかを考察することが可能になること、探究科目だからこそ近代における前近代史の受容、すなわち史学史の教材化が可能になることなどが論じられた。

前島礼子（都留文科大学）「IBDP History と歴史学：中等教育における歴史探究授業の可能性」では、国際バカロレア（International Baccalaureate）の考え方や目的を踏まえた上で、その中で歴史 History がどのような位置づけをもつのかが紹介された。大学入学資格としても使用可能な Diploma の取得が目的となる IBDP の科目 History は、全受講生（高2、高3）に対して「歴史学」の基礎的な知識・思考・技能を教授するカリキュラムであり、史料の効果的な扱い方を含めて「歴史学的技能」の修得が目的とされている。その評価方法は、生徒が自由にトピックを選択して（授業内容と関連させる必要はない）、教員の指導のもとで小論文を作成するというものである。なお、日本中世に関する内容は「アジアとオセアニアの歴史」の中に含まれ、モンゴル襲来などが題材となるが、そのプラン例が提示された。日本の学校教育・歴史教育とは全く異なる制度設計ではあるが、歴史学的技能の修得は探究科目とも重なるところがあるだけに、その困難さや学習評価の難しさが質疑でも議論になったし、史料読解に重点を置きがちな日本の探究学習の特徴などが明らかになったと思われる。

コメントは矢景裕子（神戸大付属中等教育学校）「コメント①世界史教育の立場から」と佐野理恵子（清水書院）「コメント②教科書編集者の立場から」の二本があった。矢景コメントでは、今回の諸報告にあった「視点」の重要性と自身の授業実践の紹介がなされた。佐野コメントでは、教科書編集者の立場からみた日本史教科書の特徴や課題などが語られた。

総合討論では、中学と高校の歴史教育の違い（通史学習を繰り返すことになる／中学校の歴史で必要な知識とは）、大学・大学院における IBDP の教員養成の現状と課題、歴史修正主義への対応、国語など他教科との情報交換、協同などが論じられた。さらに報告者たちからのコメントとして、高校生でも読むことのできる資料の開発、資料読解が教科書本文の補足にとどまらないための工夫、歴史的事象に対して異なる評価が有り得るということを資料からどう導くのか、あるいは概念理解やコンセプトを軸とした学習において他教科とも連携する可能性や世界史・日本史を越えた協同の可能性などが指摘された。

会場とウェビナーによるハイブリッド開催だったこともあり、当日の参加者は約二〇〇名（うち学外者は約一七〇名）であり、会場参加者も八十名ほどであった。立教大学の教室施設がハイブリッド授業に対応していたため、特に技術的な問題はなく実施することができた。二〇二三年四月からの新科目日本史探究の開始を前にして、多くの関心を惹きつけたようであり、現役の高校生・大学生を含めた大学関係

者・高校関係者だけではなく、歴史教育に関心のある一般の方も多く見られた。高大連携の試みはとりわけ近代史や外国史を中心に活発なイメージがあるが、あえて前近代・日本史に焦点を当てて、新たな問題提起を行っていくことの重要性を再認識した次第である。

《刊行物》

『立教大学日本学研究所年報』第二十一号（二〇二二年八月）